日本橋オペラ 2015

R. WAGNER
Tristan und Isolde

2015年 5月2日(土) 日本橋劇場

第１幕：13:00
第２幕：15:30
第３幕：18:00

日本橋オペラ代表　福田祥子

ごあいさつ

はじめまして、日本橋オペラです！ 本日は日本橋オペラ 2015「トリスタンとイゾルデ」にお出かけ頂きありがとうございます。日本橋は由緒ある地名ですが、一昨年、中央区在住・在勤の有志を中心に日本橋オペラ研究会が発足し、中央区の社会教育関係団体として活動して参りました。オペラは文化のバロメーターであり、西洋ではその国の文化の成熟度を測る一つの指針とさえ言われます。明治維新（1868 年）の数年前（1865 年）にドイツで初演され、究極のオペラとまで言われる「トリスタンとイゾルデ」が、ちょうど 150 年後の今日、はじめて日本人だけの手で上演されます。「日本人にワーグナーは無理」という否定的な声が大半の中、日本橋オペラでは、あえて「トリスタンとイゾルデ」を旗揚げ公演に選びました。もっとも上演の計画は数年前から進行しており、一昨年には演奏会形式で「トリスタンとイゾルデ」全曲を、今日の中心となるメンバーで上演しています。そういう意味では、無謀な試みではなく、満を期して、自信を持って上演します。長く、難解な・・・と形容詞の付くワーグナーのオペラを、少しでも楽しんでいただけるように、今回は字幕を用意し、またひと幕だけでも楽しんでいただけるようにチケットを設定しました。さらにロビーには、当会所蔵の人気現代美術家、奈良美智（ならよしとも）さんの処女作とも言える貴重なドローイングや、今回の公演のために委嘱した、ニノ・カルミゼさんの絵画「トリスタンとイゾルデ」も展示して、アートな演出しています。それぞれ 1 時間の幕間休憩は、上記の絵画鑑賞、あるいは歴史ある近隣の散策をお楽しみ下さい。プログラムにはお食事やお茶のできるお店を紹介しています。今回はひと幕しかご覧になれなかったお客様が、次回は是非全幕を見たいと思って頂けるような公演を目指します。日本橋という土地ならではの、総合芸術としてのオペラをお楽しみ頂けると幸いです。なお次回公演は 2016 年 4 月 30 日（土）に、本日と同じ日本橋劇場で、プッチーニ作曲「トスカ」を予定しております。日本橋オペラを今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

作曲・台本　リヒャルト・ワーグナー *Richard Wagner*

(1813 年 5 月 22 日 ライプツィヒ～1883 年 2 月 13 日 ヴェネツィア)

ドイツの作曲家、指揮者、理論家、文筆家。音楽界だけでなく 19 世紀後半のヨーロッパに広く影響を及ぼした中心的文化人の一人。ドイツ国民オペラの流れを引き継ぎ、指導動機（ライトモティーフ)、無限旋律、異名同音（エンハーモニック）等の革新的な手法を用い、さらに台本も自ら書き、音楽と劇を融合した総合芸術としての「楽劇」を完成させた。代表作である楽劇『ニーベルングの指環』は、「ラインの黄金」「ワルキューレ」「ジークフリート」「神々の黄昏」の 4 つの楽劇からなる、上演に 4 日間、15 時間以上かかる人類最大のオペラ。故郷での教育後、パリ放浪時代を経て「リエンチ」の成功により王室ザクセン宮廷指揮者に就任する。しかしドレスデン革命運動に参加したことから、全ドイツに指名手配となりスイスへ亡命。当地で富豪の妻との不倫騒動や借金地獄に陥るも、バイエルン王ルートヴィッヒ 2 世の庇護を受け奇蹟の復活を果たし、バイロイトに自らのオペラだけを上演する祝祭劇場を建築した。

指揮　佐々木 修 *Osamu Sasaki*

青森県弘前市出身。武蔵野音楽大学卒業。オーストリア政府奨学生としてザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学指揮科に学び、カラヤン、チェリビダッケなどの巨匠に師事。同大学を最優秀で卒業後、同大学オーケストラ常任指揮者をつとめる。1979 年カラヤン国際指揮者コンクールに入賞。1982 年ザルツブルク国際モーツァルト週間に、はじめての東洋人の指揮者としてデビュー「心から自然でしなやか、新鮮なモーツァルト指揮者」（オペラ・コンツェルト誌）と高い評価を受ける。この演奏により、国際モーツァルテウム財団よりパウムガルトナーメダルを、また国際ザルツブルク協会より奨励賞を授与される。帰国後、各地のオーケストラや合唱を指揮する一方、NHK や民放の音楽番組のパーソナリティー、制作者など幅広く活動。近年はワーグナー指揮者として『ラインの黄金』『ワルキューレ』『ジークフリート』『神々の黄昏』『さまよえるオランダ人』『トリスタンとイゾルデ』と連続して指揮をして、「新しいワーグナーの世界を切り拓いてくれる、独創的で魅力的な音楽創り」「緊張感の保持とドラマティックな盛り上げ方を高く評価したい」と批評を受けている。また、女性向け携帯コンテンツ「ルナルナ☆女性の医学」のビジネスプランの作成、企画、開発など、IT の世界でも活躍している。(株) マエストロ代表取締役

演出　館 亜里沙 *Arisa Tachi*

東京藝術大学音楽学部楽理科卒業。同大学大学院修了（専攻：音楽学)。2009 年安宅賞受賞。2008 年よりオペラを中心に演出を手掛ける。これまで《奥様女中》(2010 年)、《ポッペアの戴冠》(2011 年)、《バスティアンとバスティエンヌ》（2012 年)、《ヘンゼルとグレーテル》（2013 年)、《スザンナの秘密》（2013 年)、《オルフェオとエウリディーチェ》（2014 年）《スペインの時》（2015 年）などを演出する他、『サーバ／周辺／世界―イプセン、グリーグ《ペール・ギュント》による音楽劇』（2012 年)、『輪舞曲―金子みすゞの詩による音楽劇』（2012 年）など、翻案作品の演出にも取り組む。2010 年より世界的名演出家 P. コンヴィチュニー氏のオペラ・アカデミーに参加し、同氏の弟子を名乗ることを許される。ピアノ演奏でも活動し、前述の『輪舞曲』では、自身でピアノ演奏も手掛ける。書家紫舟「おはよう ありがとう ごめんなさい」展 BGM を製作・演奏（2011 年)。最近ではこども向けのプログラムの演出・演奏や、オペラ・ガラの構成／演出、教育機関での音楽劇の指導も担当し、活動の場を広げている。

トリスタン 第１幕 ~ 第２幕

片寄純也 *Jyunya Katayose* (テノール)

国立音楽大学声楽科卒業。ヴェルディ作曲オペラ『椿姫』アルフレード役に抜擢されオペラデビュー。これまでにヴェルディ作曲『運命の力』『仮面舞踏会』『エルナーニ』『アイーダ』、プッチーニ作曲『ラ・ボエーム』『外套』『蝶々夫人』『トスカ』、マスカーニ作曲『カヴァレリア・ルスティカーナ』、レオンカヴァッロ作曲『パリアッチ』、ビゼー作曲『カルメン』、ワーグナー作曲『さまよえるオランダ人』『ニュルンベルクのマイスタージンガー』『パルジファル』、シュトラウス作曲『サロメ』など多数のオペラに主要な役で出演し、ヴァイグレ、フロール、アッレマンディ、ゾルデス、カリニャーニ、シルマーやクラウス・グート、ペーター・コンヴィチュニーなど世界的な指揮者や演出家、ＮＨＫ交響楽団、東フィル、都響、読響など日本を代表するオーケストラ団体と共演をし好評を博す。本年 10 月には新国立劇場ワーグナー作曲『ラインの黄金』に出演予定。二期会会員。

トリスタン 第３幕

升島唯博 *Tadahiro Masujima* (テノール)

広島出身。エリザベト音楽大学を卒業後 2001 年に渡独。デトモルト音楽大学にて声楽教育ディプロムを取得。その後リューベック音楽大学を卒業し声楽ディプロム取得、同大学院オペラコースを首席で修了。2008 年にブレーメン歌劇場とソロ契約を結ぶ。2010 年よりフリーのソロ歌手としてハンブルク州立劇場、ブレーメン歌劇場、ハイデルベルク歌劇場、ミュンスター歌劇場、リューベック歌劇場、ベルン歌劇場 (スイス) などで客演。ドイツのジングシュピールを得意とした役柄を多く歌い、古典から現代までの幅広いレパートリーを歌う。ワーグナーのオペラ「ラインの黄金」ローゲ、ミーメ役で東京デビュー後、日生劇場 50 周年記念オペラ「フィデリオ」(飯守泰次郎指揮) ヤッキーノ役、まつもと市民オペラ「カルメン」(大勝秀也指揮) レメンダード役、小澤征爾音楽塾「フィガロの結婚」(小澤征爾指揮) ドン・クルツィオの本役、「愛の妙薬」ネモリーノなどで出演。2015 年 7 月には二期会本公演「魔笛」(宮本亜門演出) に僧侶２としてデビュー。2014 年より拠点を日本へ移し活動中。二期会会員。

イゾルデ

福田祥子 *Shoko Fukuda*（ドラマティックソプラノ）

兵庫県出身。大阪音楽大学ピアノ科卒業後声楽に転向。大阪芸術大学大学院声楽専攻修了。第６回大阪国際音楽コンクール第２位。東京二期会オペラ研修所 54 期本科首席修了、優秀賞受賞。近年特にワーグナー歌手として注目されており「ワルキューレ」「ジークフリート」「神々の黄昏」それぞれブリュンヒルデ役、「トリスタンとイゾルデ」イゾルデ役、「さまよえるオランダ人」ゼンタ役等に出演。『圧倒的にして鮮烈な歌声と存在感。生まれながらのブリュンヒルデ』『日本では稀有な本格的ワーグナー歌手の誕生』と絶賛されている。イタリアオペラでは「蝶々夫人」同役、「ドン・カルロ」エリザベッタ役、「椿姫」ヴィオレッタ役等に出演。いずれも高い評価を得ている。2010 年にリリースされた CD「イタリア・オペラアリア集」は『圧倒的な声量で深々と歌われる福田の歌、スケールは極大。日本にも真に世界にも通用する本格的なオペラ歌手誕生か』と音楽現代誌の推薦を受けた。さらに海外では、ウィーン、テルアビブ、ソフィア等でリサイタルやオーケストラと共演している。本年 9 月、トゥーランドット（首都オペラ）のタイトルロールとして出演予定。ウィーン在住。ウィーン国立歌劇場とバイエルン国立歌劇場で研修を受けている。日本橋オペラ代表。

マルケ王

片山将司 *Masashi Katayama*（バス）

東京藝術大学卒業、同大学院修士課程修了。第 50 回全日本学生音楽コンクール大阪大会第一位。新国立劇場オペラ劇場に於いて2004 年 25 歳で「エレクトラ」の年老いた下僕で同劇場にデビュー。翌年 2005 年「マクベス」医者役で出演。同劇場に於いてカヴァーキャストとしても様々な公演に携わる。2011 年小澤征爾音楽塾「フィガロの結婚」東京、パリ、ニューヨーク公演のキャストとして抜擢された。ドイツ歌曲、ロシア歌曲にも精力的に取り組んでいて、2015 年 5 月すみだトリフォニーホール小ホール於「白鳥の歌」全曲リサイタル予定。ひので会コーラス指揮者、様々な公演での助演講師と活動は多岐に及ぶ。大妻多摩中学高等学校音楽講師。日本声楽アカデミー会員。高橋大海氏に師事。

クルヴェナル

勝村大城 *Daiki Katsumura*（バリトン）

国立ミュンヘン音楽大学大学院修了。全日本学生音楽コンクール東京大会特別賞受賞、彩の国新人オーディション合格。これまでに『フィガロの結婚』フィガロ、アルマヴィーヴァ伯爵、『魔笛』パパゲーノ、『コズィ・ファン・トゥッテ』グリエルモ、『真夏の世の夢』ディミートリウス、『ラインの黄金』ヴォータン、『愛の妙薬』ドゥルカマーラなど多数のオペラに出演。時代を問わない幅広いレパートリーと類稀な声で好評を博している。またオペラだけでなく、合唱曲のソリストとしても活躍。鎌ヶ谷きらりホールのこけら落とし公演では第九のソリストを務め、非常に高い評価を得た。またドイツ歌曲のコンサートも多数開催し好評を得ている。今月 24 日に新国立劇場中ホールでの『ジューリオ・チェーザレ』にアキッラ役で出演予定。来年 1 月には彩の国さいたま芸術劇場音楽ホールにて待望のシューベルトの連作歌曲『冬の旅』の全曲公演が控えている。二期会会員。

ブランゲーネ

平舘直子 *Naoko Hiradate*（メゾソプラノ）

国立音楽大学声楽科卒業。沖縄県立芸術大学大学院修了。二期会オペラ研修所プロフェッショナルコース総合修了。二期会会員。ルーマニア国立ヤシ歌劇場「コシ・ファン・トゥッテ」ドラベッラ、二期会オペラ劇場「ワルキューレ」ロスヴァイゼ、首里城野外オペラプレ公演「魔笛」第二の侍女、新作日本オペラ「ひとりオペラ与謝野晶子みだれ髪」主役晶子の初演、再演を重ねる、第 56 回 NHK ニューイヤーオペラコンサートにワルキューレンで出演、ワーグナー生誕 200 周年記念公演「ワルキューレ」(神奈川県民ホール・びわ湖ホール) ロスヴァイセで出演。他「ジャンニ・スキッキ」ツィータ、「こうもり」オルロフスキー、「リゴレット」マッダレーナ、「カヴァレリア・ルスティカーナ」サントゥッツァ、「修道女アンジェリカ」侯爵夫人、「ナクソス島のアリアドネ」作曲家、「ラインの黄金」フリッカ、「神々の黄昏」ヴェルグンデなどに出演。

若い水夫 / メーロト / 船員　並木隆浩 *Takahiro Namiki*（テノール）

埼玉県出身。国立音楽大学卒業。洗足学園音楽大学大学院修了。2009年いしかわミュージックアカデミー、マスタークラス修了。2014 年ウィーン国立音楽大学夏期マスタークラスディプロマ修了。大学卒業時に成績優秀者による卒業演奏会に選抜。これまでに「トリスタンとイゾルデ」メーロト、「マタイ受難曲」エヴァンゲリスト、「ディドとエネアス」水夫、「岐路に立つヘラクレス」徳、など歌劇から宗教作品まで幅広く出演している。声楽を河合孝夫、岩渕嘉瑩、山下浩司、U. ハイルマンの各氏に師事。アンサンブルグループ「Affetti mvsicali」メンバー。日本声楽発声学会会員。

牧人 / 船員　堀越尊雅 *Takamasa Horikoshi*（テノール）

福島県会津若松市出身。国立音楽大学音楽学部演奏学科声楽専修卒業。これまでに声楽を久保田真澄、吉田浩之、佐藤淳一、高橋祐二の各氏に師事。また、白井光子、N. シェトラーの各氏にリート演奏法の薫陶を受ける。主にシューベルトの作品をはじめとしたドイツリートをレパートリーの中心に据え置き演奏活動を重ねる他、J.S. バッハのカンタータのソリストを務めるなどして、宗教曲の分野へも活動の幅を広げつつある。第 24 回友愛ドイツ歌曲 (リート) コンクール入選。アンサンブル団体ＣＭＴ(コンツェントゥス・ムジクス・トウキョウ) メンバー。

舵取り / 船員　望月一平 *Ippei Mochizuki*（バリトン）

静岡県出身。武蔵野音楽大学卒業、同大学院修士課程修了。平成 24 年度武蔵野音楽大学オペラ公演「魔笛」、パパゲーノ役でデビュー。これまでに「コジファントゥッテ」グリエルモ、「ドン・ジョヴァンニ」マゼット役、「こうもり」ファルケ、「カルメン」モラレス、スニガ、「ハムレット」クローディアス、「ティレジアスの乳房」プレスト役、「愛の妙薬」ドゥルカマーラなどで出演。「第 16 回静岡の名手たち」オーディション合格。合格者による演奏会に出演。また、ドイツ歌曲の演奏も意欲的に取り組んでいる。これまでに打田忠義、平良栄一、堀内康雄、故 E. オブラスツォワの各氏に師事。

船員　奥村泰憲 *Yasunori Okumura*（バリトン）

エリザベト音楽大学宗教音楽科卒業、同大学院修了。2005 年よりウィーン国立音楽大学声楽科、プライナー音楽院指揮科・オペラ科で研鑽を積む。2006 年ウィーンでシュッツ「マタイ受難曲」イエス役でソリストデビュー、また同地でグルック「トーリードのイフェジェニー」トアス王を歌いオペラデビュー。フランス、デンマーク、マケドニア、オーストリア、ドイツで独唱会。これまでバッハ、ヘンデル、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンなど多数ソリストを務める。オペラでは 30 の役を演ずる。2012 年帰国。現在バッハコレギウムジャパン、古楽集団アフェッティムジカーリ所属、ヴォーカルコンソート東京コンサートマスター、東京バロックスコラーズ、オラショクラブ指導者。

「夜」の創出　――《トリスタンとイゾルデ》演出ノート　　舘 亜里沙

舞台芸術というものが創り上げる世界は、大きく 2 種類があるのではないかと思います。1 つは、現実よりも「現実らしい」世界。そしてもう 1 つは、現実には「決して成しえない」世界。同じワーグナーの代表作でも、《ニーベルングの指環》はこの 1 つ目の世界を表出することに長けており、実際多くの演出家が、物語により具体的な時間や場所を与え、興味深い演出を行ってきました。「それを手にすれば世界を支配できると信じられている指環」や「自然を破壊して切り出した槍」といった象徴的なアイテムは、「これを今の世界に置き換えたら何に当たるだろう？」という想像を掻き立ててくれます。

では《トリスタンとイゾルデ》はどうでしょうか？事態を大きく動かす「媚薬」に置き換えられるものが、今の私達の世界にはあるでしょうか？また、トリスタンとイゾルデが語り合うような「永遠の夜の世界」はいったいどこにあるのでしょうか？答えは「そんなものはない」だと思います。私達の社会は、あらゆる事情や心境を抱えた人間が集ったもの。そのようなところに、特定の男女だけが周囲の目や体面を全く気にすることなく、永遠に愛し続けるという状況は、存在しえないのです。

しかしながら、私達は「憧れる」ことは出来ますし、存在しえないものに「憧れる」ことで、自分の生きる時間に彩を与えることは出来ます。確かに魔法の薬も永遠の愛も、現実には見当たりませんが、この世界のどこかにあったならば、あるいは死後の世界にあったならば、と憧れることによって、無いものを心の中に創出することは出来ます。そうして心の中に創出されたものは、とても美しいものではないでしょうか。

さて、ここで舞台芸術によるもう一つの世界が、その力を発揮します。芸術の醍醐味の 1 つは、心の奥や夢の中といった、実際には目に見えないあるいは実態の掴めない事象も、何らかのかたちに出来てしまうことだと思います。とりわけ様々な芸術要素が絡み合うオペラでは、それらの要素が化学反応を起こして、大きな世界を創り上げることが出来ます。《トリスタンとイゾルデ》はまさに、主人公達の希求する「夜の世界」を、芸術によって創出している作品であり、「現実には成し得ない」世界を創出するという舞台芸術の力を、存分に引き出しているのです。

今回の演出では、各セクションのアーティストに、各々にとっての「夜」を表していただきました。美術家岩谷駿さんの含蓄に富んだ絵、衣装家杉澤香織さんの明快な色使い、照明家田村さんの幻想的な光、そして歌手の皆さんの表情豊かな声が、トリスタンとイゾルデの死に向けて、いかに「夜」を蘇らせるのかを、楽しみに観ていただければ幸いです。

《トリスタンとイゾルデ》舞台日美術下絵

あらすじ

舘 亜里沙

【第１幕】

第１場　アイルランドの王女イゾルデは、コーンウォールの王マルケに嫁ぐための船旅に出ているが、憔悴しきっており、恥辱に苦しむ気持ちを露わにする。かつてアイルランドはコーンウォールに貢納を課していたが、今や形勢は逆転していた。イゾルデの母にあたる女王は、娘の許婚であった豪傑モーロルトをコーンウォールへ送り込み、貢物を取り立てようとしたが、その結果はモーロルトの首が返上されるという屈辱的なものであった。モーロルトを討ち取ったのは、トリスタンという名の騎士であったが、彼はイゾルデから許婚を奪ったのみならず、まだ跡継ぎのないマルケ王にイゾルデを勧めたのだ。２人の結婚は、両国にとっては和解の契機となる祝福すべき出来事であるが、イゾルデ本人にとっては受け容れ難いものであり、そのような事情から行われている船旅を、彼女が楽しめるわけもなかった。

第２場　息が詰まりそうだと叫ぶイゾルデに、侍女ブランゲーネは急いで船室の幕を上げる。船の舵が見え、そこにはトリスタンの姿があった。彼の姿を見て再び王女としての自尊心を燃やした彼女は、ブランゲーネにトリスタンを挨拶に連れて来るよう命じる。ブランゲーネは戸惑うものの、女主人の言う通りトリスタンの元へ向かった。ところがトリスタンは「今舵を離れたら、船路を違うことなく花嫁をお届けすることが出来ない」と言い逃れ、ブランゲーネの言葉に耳を貸さない。そこへさらにトリスタンの従者クルヴェナルが、船員達とともにアイルランドをからかい始め、ブランゲーネは怒りと悔しさのうちに立ち去るしかなかった。

第３場　ブランゲーネからトリスタンとクルヴェナルの態度について聞いたイゾルデは、憤りと哀しみの頂点に達し、自分がなぜそこまでトリスタンを憎むのかを語り始める――モーロルトを倒したトリスタンは、自らも負傷し、剣に塗られていた毒に苦しんでいた。その毒を癒すことが出来るのはイゾルデであることを知った彼は、名前を「タントリス」と偽り、密かにアイルランドに入っていた。イゾルデは「タントリス」の正体がトリスタンであることを見破り、モーロルトの仇を討とうと剣を手にしたが、トリスタンと目が合ったとたん、剣を下してしまった。そしてトリスタンの傷を直し、誰にも口外することなくコーンウォールへと返した――トリスタンとの愛の絆を感じたイゾルデにとって、彼がマルケ王に自分を勧めたことは、裏切りでしかなかったのだ。ブランゲーネがなだめるのも聞き入れず、イゾルデは今の自分に必要なのは苦しみから逃れるための死であり、母から受け継いだ死の薬をトリスタンとともに和解の杯として飲む、とまで言い出す。ブランゲーネが途方に暮れているところへ、クルヴェナルがやってくる。

第４場～第５場　クルヴェナルは、間もなく船がコーンウォールへと到着することを告げ、イゾルデに支度をするよう促す。だがイゾルデは、トリスタンが自ら挨拶に来なければ、王の前には出向かないと言い出し、引き下がらない。困ったクルヴェナルはトリスタンを呼び、ついにトリスタンはイゾルデの前に姿を現す。トリスタンは、仇討をしたいのならば今度こそ自分を殺せばよいと剣を差し出すが、イゾルデはそれを退け、和解の杯を共にすることを提案する。そして、ブランゲーネに毒薬を用意させ、互いに飲み干す。ところが毒を飲んだはずの２人は死なず、恋に燃え上がってしまう。なんとブランゲーネは、イゾルデの死を恐れ、毒薬の代わりに媚薬を注いだのだ。本来この媚薬は、イゾルデが年老いたマルケ王と円満な生活を送れるよう、母である女王が持たせたものだったが…ブランゲーネが慌てるのも後の祭り。２人は、周囲が船を出迎えたマルケ王にひれ伏しているにも関わらず、互いの名を呼び合うだけであった。

【第２幕】

第１場　船は無事にコーンウォールに到着し、イゾルデは予定通りマルケ王の后となった。しかしながら、媚薬の効用で互いの愛を抑えられなくなったトリスタンとイゾルデは、密会を重ねている。その日も、王が夜の狩に出かけたのを機に、イゾルデはトリスタンを宮殿の庭に呼ぼうとする。ブランゲーネは、夜の狩りが急に計画されたこと、また計画したのはトリスタンの異変に感づいたメーロトであることを告げ、密会を辞めさせようする。だが、トリスタンへの愛に溺れるイゾルデに、その言葉は届かない。それどころかイゾルデは、トリスタンの友人であるメーロトが自分達を裏切るはずがないと言い張り、自ら庭に灯していた明かりを消してしまった。

第２場　明かりが消えたのを合図に、トリスタンが姿を現す。ようやく訪れた「夜の時間」に、２人の興奮は頂点となり、長い愛の２重唱が始まる。始めは激しく互いの愛を確かめ合い、「昼」という言葉に表象される現実社会を疎んでいた２人は、やがて永遠の「夜」なるものへの憧れを深めてゆく。見張り台からブランゲーネの「気を付けて！」という声が響くが、それは２人にますます「夜」を求める気持ちを湧き起こさせるだけであった。

第３場　そこへ突如、メーロトと彼に導かれたマルケ王が現れ、密会の現場を抑える。ブランゲーネの懸念は本当だったのだ。メーロトは、トリスタンとイゾルデの不倫についての自分の密告が正当であったと主張し、マルケ王は目の当たりにした密会の光景に酷く傷つく。王の嘆きに、トリスタンは「それには答えられない」と応じ、皆の面前でイゾルデを「夜」の世界へと誘う。トリスタンの態度に、メーロトは激昂して剣を抜く。２人は決闘となるが、トリスタンは故意にメーロトの剣先に飛び込み、倒れる。

【第３幕】

第１場　忠実なクルヴェナルは、深手を負ったトリスタンを、彼の故郷であるカレオールへと運んだ。そして、唯一トリスタンの傷を癒せるはずのイゾルデが来るのを、ひたすらに待っている。ようやく意識の戻ったトリスタンであるが、自分が故郷に戻ったことも認識できず、その容態は芳しくない。だがクルヴェナルから、イゾルデが生きていて自分のもとに向かっていることを聞くと、激しく興奮する。そしてクルヴェナルの心配もかまわず、ひたすらイゾルデとの出会いや恋路を回想し、彼女を求めるのであった。その時ようやく、海原に船の姿が見える。船からイゾルデが手を振っているのを見たクルヴェナルは、イゾルデを迎えに走り行く。

第２場　イゾルデとの再会が訪れることに狂喜したトリスタンは、高揚のあまり傷を塞いでいた包帯を引きちぎり、血をしたたらせてゆく。そして駆けつけたイゾルデの姿を見るなり、彼女の腕の中で息を引き取る。イゾルデも衝撃のあまり気を失い、クルヴェナルはその光景に愕然とする。

第３場　その時、船がもう一艘入り、マルケ王とメーロト、そしてブランゲーネも現れた。自暴自棄になったクルヴェナルはメーロトを討ち、自らもマルケ王に切りかかって重傷を負い、トリスタンの傍らに息絶える。実は、マルケ王はブランゲーネから事の次第を全て聴き、トリスタンとイゾルデを赦すためにやって来たのであるが、時は遅かった。王は、自分が皆の無惨な死を招いたことを嘆く。

　そこへ意識を取り戻したイゾルデが起き上がる。ブランゲーネとマルケ王は必死に彼女に問いかけるが、答えはない。もはや生死を超えた域に達したイゾルデは、晴れやかにトリスタンへの愛を歌い、彼が先に旅立った世界へと、昇天してゆくのであった。

トリスタンとイゾルデの成立

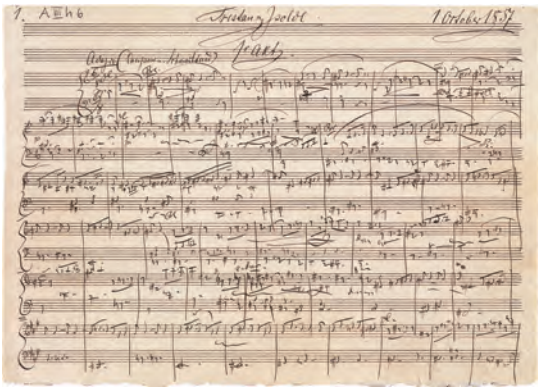
ワーグナーというと、どうしてもドイツのバイロイトが真先に思い浮かばれますが、『トリスタンとイゾルデ』は、意外にもスイスの雄大な自然と美しい女性によって生まれました。ワーグナーは 1813 年ドイツのライプツィヒに生まれます。ドレスデンやライプツィヒで教育を受けた後、20 歳代の遍歴の時代を経て、29 歳のときドレスデンで初演された『リエンツィ』が大成功して、王室ザクセン宮廷指揮者に就任します。さらに『さまよえるオランダ人』『タンホイザー』『ローエングリン』といった、いわゆるロマン的オペラを次々と初演して、当時すでに大作曲家、名指揮者としての確固たる地位を築いていました。ところが世間的な成功にも関わらず、劇場の旧態依然としたシステムに不満を持ち「改革案」を提出しますが、劇場からは完全無視されます。そこでワーグナーは、理想の芸術を実現するためには社会改革が必要だと決意して過激な行動に突入していきます。ちなみに、ワーグナーの「一切を焼き尽くして、そこからの再生」というヴィジョンはここで生まれ、『神々の黄昏』の最終場面「ヴァルハラ城を焼き尽くす業火」で結実します。1849 年 5 月 3 日ワーグナーが 36 歳の春、ドレスデン革命が勃発し、宮廷劇場が炎上します。ワーグナーはこの放火犯に擬せられ、全ドイツに指名手配されました。なんとか逃亡したワーグナーは、ワイマールのリストのもとへ駆け込み、その後中立国であるスイスへ逃亡、上演に 4 日間もかかる超大作『ニーベルングの指環』の作曲に取りかかります。1854 年には『ラインの黄金』『ワルキューレ』の作曲が進められていましたが、この頃、あまりにも巨大な（上演の実現性がまったくない）指環の作曲を中断して、「小規模で簡単に上演されうる作品」として着想されたのが『トリスタンとイゾルデ』なのです。1857 年からは、チューリッヒの豪商オットー・ヴェーゼンドンクの別荘に滞在します。トリスタンの台本が書かれた頃には、ヴェーゼンドンク夫人マティルデとの熱烈な愛に発展しており、この経験が作品に与えた影響はまぎれもない事実です。その熱烈な不倫の愛のエネルギーにより、当初の「簡単な」オペラとは正反対の、長大な、難曲中の難曲になりました。ワーグナーがマティルデに宛てた手紙の中で、作曲中のトリスタンについて「何かとてつもなく恐ろしいものになりそうだ、特に最終幕といったら！　もしも完璧な上演がなされたら、人々は狂気に追い込まれてしまうに違いない」と書き送っています。この予言はかなりの部分で的を得ており、トリスタンの完成後 1862 年にウィーンで初演を試みた際は、実に 77 回の稽古を重ねながら「上演不可能！」とお蔵入りされました。また、ヴェーゼンドンク別荘に当時頻繁に訪れていた、ドイツを代表する哲学者ニーチェをして「私は今日なお、身の毛もよだつ、永遠の甘い無限の危険性を秘めた、トリスタンのような作品を追い求めています」と言わしめています。ワーグナーは 1857 年から 1 年 3 ヶ月をヴェーゼンドンクの別荘（ワーグナー曰く、避難所）に滞在しましたが、マティルデとの関係は、ついにワーグナーの妻ミンナの知る所となり、ワーグナーはヴェネツィアに、ミンナはドレスデンにそれぞれ旅立ち、「避難所」時代は終わりを告げます。その後、ワーグナーはスイスに戻り、ルツェルンに滞在してトリスタンの総譜を完成します。

ドレスデン革命後の指名手配写真（1853 年）

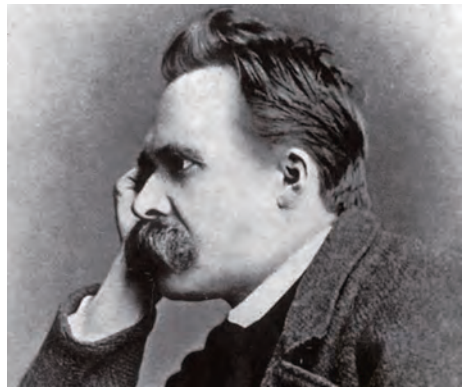
焼け落ちたドレスデン宮廷歌劇場（1849 年）

チューリッヒ

ヴェーゼンドンクから提供された避難小屋



トリスタンとイゾルデ前奏曲のスケッチ



フリードリヒ・ニーチェ (1844-1900)

ルツェルン

ぜひ《指環》の完成を急いで下さい。上演は私がとりはからいます。生活上の煩わしさは、すべて私が引き受けます。

ルートヴィヒ 2 世（1845〜1886）1864 年にバイエルン王に即位し、それまで心酔していたワーグナーを経済的に支援して、オペラの作曲と上演を促した。その庇護により、破綻状態だったワーグナーの生活は一変し、トリスタンとイゾルデの上演や、ニーベルングの指環の作曲、あるいはバイロイト祝祭劇場の創立などが可能になった。ワーグナーとっては正に救世主。

リスト宛の手紙（トリスタンの発想）

私は実生活で一度も愛の幸福を味わったことがないので、愛という、このすべての夢の中でも最も美しい愛のために、一つの記念碑を打ち立てたい。

後援者

マティルデ宛の手紙

私は私の夫を奪ったあなたに、この手紙を心臓から血を流しつつしたためます。

夫婦

ミンナ・プラーナー（1809-1866）ワーグナーの最初の妻。舞台女優。1836 年に結婚するが、夫婦関係はいさかいが絶えなかった。ワーグナーがヴェーゼンドンク夫人へ書いたラブレターを目にしたことから、ワーグナーとヴェーゼンドンク夫人との関係は破綻する。

リヒャルト・ワーグナー
（1818-1883）

後援者

しばしの間、何にも邪魔されずに二人だけでお会いしたい！どうか私の全身全霊をお受け取り下さい！

恋人

夫婦

オットー・ヴェーゼンドンク（1815-1896）スイスのチューリッヒに住む裕福な商人。ワーグナーの後援者の一人で、政治犯として逃亡していたワーグナーに、自宅の隣の館を提供した。

（1828-1902）マティルデ（ヴェーゼンドンク夫人）ワーグナーの音楽に惹かれ、ワーグナーの恋人になる。トリスタンとイゾルデの成立にも大きな影響を与えた。

娘コジマと弟子のビューロー
ワーグナーの三角関係について

ワーグナーの天才は、高い所にあるのです。それを遂行するためにはコジマの愛が必要だったのでしょう。それ以上は私にもわかりません。

友人

フランツ・リスト（1811〜1886）ドイツ系の両親のもと、ハンガリーに生まれる。19 世紀を代表する大ピアニスト、大作曲家。ワーグナーの音楽を高く評価した。バイロイト音楽祭で上演されたトリスタンとイゾルデを見た後に急死。

師弟関係

バッハ、ベートーヴェン、ブラームスを「ドイツ三大B」と呼んだのは私です。もっともワーグナーにコジマを盗られた恨みがなかったと言ったら嘘になりますが・・

師弟関係

ハンス・フォン・ビューロー（1830〜1894）ドイツの名指揮者。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の初代常任指揮者。トリスタンとイゾルデの初演を指揮した。フランツ・リストやワーグナーを信奉した。リストの娘コジマと結婚するが、コジマはワーグナーに心酔し、離婚する。

人は私をワーグナー亡き後、バイロイトの「女帝」と呼びますが、私はただ心を抑制し、運命を耐え忍んでいるだけです。運命は耐えられる範囲を超えることはないのだから。

親子

夫婦（後に離婚）

恋人（後に結婚）

コジマ・ワーグナー（1837-1930）フランツ・リストの娘。1857 年に指揮者ハンス・フォン・ビューローと結婚して二児を産む。ワーグナーと知合い同棲生活を送り、ビューローとの離婚が成立した 1870 年には、既にワーグナーの子供を 3 人も産んでいた。献身的にワーグナーを支え、ワーグナーの死後は、バイロイト音楽祭を取り仕切った。

親子

ワーグナーの子供達。左から
エファ・ワーグナー（1867-1942）
イゾルデ・ワーグナー（1865-1919）
ジークフリート・ワーグナー（1869-1930）
ハンス・リヒター（1843-1916）指揮者
1876 年の第 1 回バイロイト音楽祭で『ニーベルングの指環』全曲を初演した。

日本における初期のワーグナー受容史

岩倉使節団　左から木戸孝允、山口尚芳、岩倉具視、伊藤博文、大久保利通

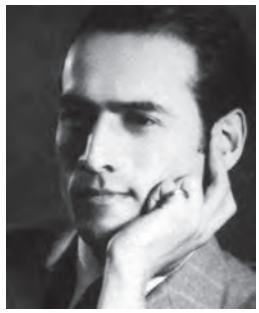
バイロイト祝祭劇場（1882 年）

最初にワーグナーの音楽に接した日本人は、おそらく明治４年（1871 年）から翌年にかけてヨーロッパやアメリカに派遣された岩倉使節団だと想像出来ます。明治 5 年にボストンで開催され、彼らが臨席した「世界平和記念国際音楽祭」では、タンホイザーの序曲や J. シュトラウス指揮のウィーンナーワルツが演奏されました。もっとも演奏に関してのコメントは『西洋ノ楽ハ、我邦人ニテ聞ケハ、千曲一調』ということで、つまりは何が何だかわからなかったということです。1872 年はワーグナーがバイロイトに定住した年で、59 歳となったワーグナーは、この後晩年の 10 年間をこの地でニーベルングの指環の完成とバイロイト音楽祭の開催に邁進します。

マンフレート・グルリット（1890 -1973）

山田耕筰（1886-1965）

近衛秀麿（1898-1973）



藤原義江（1898-1976）

明治も後半になると海外でワーグナーに接する日本人も増えて、森鴎外、上田敏、永井荷風といった知識人の名前が挙がります。明治36年(1903年)には、慶応義塾ワグネル・ソサエティ第一回演奏会が開催されます。大正から第二次世界大戦までの時代、日本でのワーグナーの演奏機会は飛躍的に増えます。大正２年（1913 年）東京音楽学校ではワーグナー百年祭記念演奏会が開かれます。また陸海軍軍楽隊ではトリスタンとイゾルデの抜粋を演奏したという記録も残っています。大正 15 年（1926 年）には現在の東京フィル、NHK 交響楽団が相次いで設立され、マンフレート・グルリット、山田耕作、近衛秀麿などの指揮でワーグナーの序曲や前奏曲が演奏されるようになります。とはいうものの、ワーグナーのオペラの上演はなかなか実現しませんでした。昭和 17 年（1942 年）ローエングリン、昭和 22 年（1947 年）タンホイザーを、それぞれ藤原歌劇団（指揮：グルリット）が日本初演をしています。昭和 16 年には太平洋戦争に突入していますから、その最中にローエングリンが初演されたことは驚くべきことです。友好国ドイツのヒトラー総裁がワーグナーを好んでいたということも理由の一つかもしれませんが、当時の国民的テノール藤原義江の存在なくして、この公演は実現しなかったと思います。今はイタリアオペラしか上演しない藤原歌劇団が、ワーグナーの日本初演を行ったというのも興味深いことです。ちなみに当時は日本語で歌われていました。

日本における「トリスタンとイゾルデ」上演史

トリスタンとイゾルデの日本初演は、1963 年日生劇場で行われたベルリン・ドイツ・オペラの引越公演です。主役は、トリスタン：ハンス・バイラー、イゾルデ：グラディス・クフタ、そして指揮は当時まだ 33 歳だったロリン･マゼールでした。1967 年には日本の音楽界にとって金字塔ともいえるバイロイト音楽祭引越公演が、旧大阪フェスティバルホールで行われました。トリスタン：ヴォルフガング･ヴィントガッセン、イゾルデ：ビルギット・ニルソン、マルケ王：ハンス・ホッター、指揮：ピエール・ブーレーズといった超一流の出演者、オーケストラは NHK 交響楽団です。この時の映像が YouTube で見られます。なお当時のチケットは最高が 3 万円、学生券が 3 千円で分割払いも可能だったそうです。

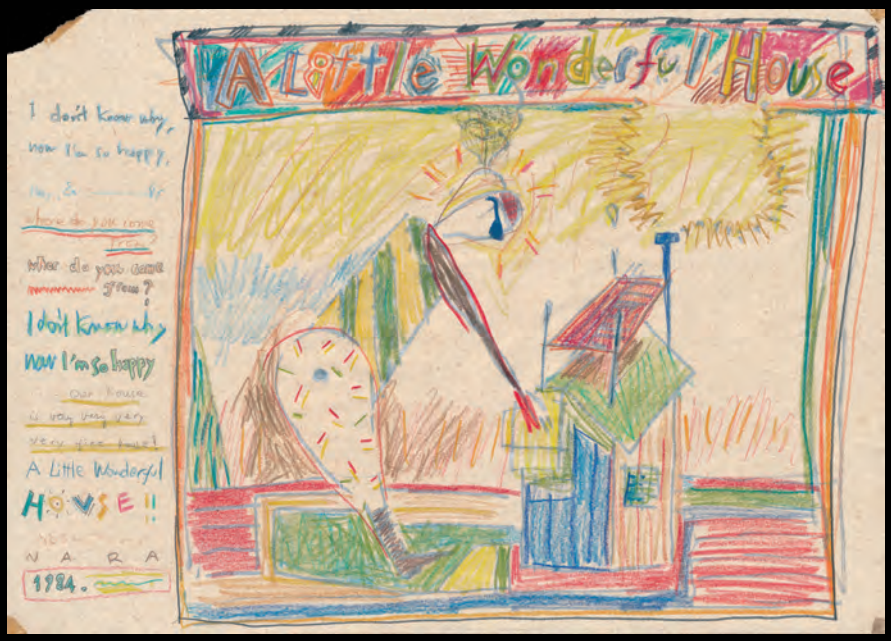
ベルリン・ドイツ・オペラ（1963 年）日生劇場

バイロイト音楽祭引越公演（1967 年）旧大阪フェスティバルホール

その後日本では、抜粋で演奏会形式の上演はあったものの、本格的なオペラとしてのトリスタンは 1990 年までありません。この年、日本ワーグナー協会とニッセイ児童文化振興財団の主催によるトリスタン（ペーター･シュナイダー指揮）が上演されました。トリスタン:ヴォルフガング・ファスラー、イゾルデ：ガブリエレ・シュナウト。なおこの際のセカンドソリストとして、トリスタン：若本明志、イゾルテ：渡辺美佐子が公演 2 日目に歌っています。また指揮者の飯守泰次郎が、この公演の指揮を依頼されたが、ヨーロッパでの仕事の調整がつかず断念したと語っています。2005 年には、国立オペラ・カンパニー青いサカナ団（神田慶一指揮）が、トリスタン：田代誠、イゾルデ：飯田みち代で上演しています。ただしこの公演は各幕が 1 時間程度に短縮されていました。2007 年にはベルリン国立歌劇場（バレンボイム指揮）､2008 年にはパリ･オペラ座（ビシュコフ指揮）がそれぞれ来日公演で上演しています。2010 年にはびわ湖ホール（沼尻竜典指揮）で、トリスタン：ジョン･チャールズ･ピアース、イゾルデ:小山由美､また新国立劇場（大野和士指揮）では､トリスタン:ステファン･グールド、イゾルデ：イレーネ・テオリンで上演されています。2013 年には、あらかわバイロイト（クリスチャン・ハンマー指揮）で、トリスタン：池本和憲、そして今日もイゾルデを歌う福田祥子により上演されています。演奏会形式はオペラよりは頻繁に行われており、近年では東京フィル (ミョンフン指揮)、新日フィル (アルミンク指揮）が上演していますが、主要ソリストはいずれも外国人でした。

トリスタンとイゾルデのミュンヘン初演（1865 年 6 月 10 日）から 150 年（54,747 日後）の今日、ソリスト、指揮者、演出家を含めて全て日本人だけの力で、全曲ノーカットでの初の舞台上演が実現します！（文中敬称略。資料は当会調べでなので、誤りがあったらお許し下さい）

奈良美智氏最初期のドローイング特別公開

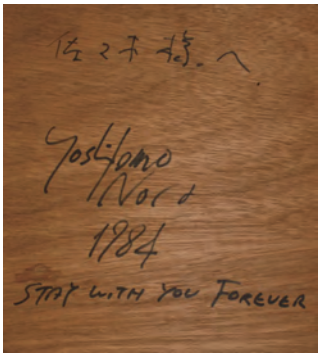


A Little Wonderful House 1984（250mm×352mm）
color pencil on paper　©Yoshitomo Nara

《子供のいたずら書き》
1984 年秋のある日、奈良美智（ならよしとも）氏が一枚のドローイングを持って、青森県弘前市城南の佐々木宅に現れた。佐々木宅は本日の指揮者である佐々木修の実家であり、奈良氏の実家は佐々木宅からわずか 400m ほどしか離れていない近所であった。この年の 9 月、弘前市のギャラリー・スペース・デネガで「奈良美智・三浦孝治二人展」が開催され、ここで修の母、佐々木悦が一枚のドローイングを購入して、この日奈良氏が持参した。ちなみに「デネガ」とは津軽弁で「そうじゃないか？」という意味。奈良氏と佐々木悦は当然のことながら津軽弁で会話をし、悦は次男の修がドイツに音楽で留学しており、この年ベルリンで指揮をしたことなどを話し、若い美術家へのエールの気持ちから購入したと語った。奈良氏は感謝し、額の裏に stay with you forever（永遠にあなたと）とサインした。それ以来、このドローイングは佐々木宅の玄関に飾られていた。その後、奈良氏が次第に有名になってからも悦はその話しはせず、この絵は家人にとって「額に入った子供のいたずら書き！」として何時も明るく迎えてくれた。

弘前市の佐々木宅

ベルリンのプログラム



奈良氏のサイン

《奈良美智の出発》
1984 年は奈良にとって公式なスタート年である。愛知県立芸術大学の 4 年に在学中、24 歳の奈良は、この年名古屋で二つの個展とグループ展、さらに故郷の弘前市でグループ展を開催している。
“Wonder Room” Gallery Space to Space 名古屋（7 月 23 日〜8 月 4 日）
“Paranoia” ギャラリーウエストベス 名古屋（9 月 3 日〜8 日）
“奈良美智・三浦孝治二人展” ギャラリー・SPACE DENEGA 弘前市（9 月 5 日〜10 日）
“It's a Little Wonderful House” ギャラリー・ラブコレクション 名古屋（9 月 24 日〜10 月 6 日）

奈良美智・三浦孝治二人展の DM

It's a Little Wonderful House の DM

今回公開されるドローイングは、奈良のデビュー年の個展のタイトルとなった作品である。2011 年奈良美智レゾネ（全集）が発刊され、1984 年から 2010 年までの約 5,000 点の作品が掲載された。残念（幸運！）なことに、佐々木修がこの全集出版を知ったのは、すでに全集が刊行された後で、結果的にこの A Little Wonderful House は 1984 年以来未公開である。ちなみに、全集では 1984 年のドローイング 9 点、アクリル・油絵 17 点が掲載されているが、Wonderful House no.5 という作品はあるが、同じタイトルが付いた作品はない。正に今回が再発見と言える。

《一瞬の熱狂》

A Little Wonderful House は、底抜けに明るい奈良美智の「陽」を表現している。このドローイングでまず圧倒されるのは、その色使いである。カラフルな色鉛筆で一気に描かれた線に、全く迷いはない。中央の人物の輪郭は、銀の色鉛筆で縁取りされている。印刷では再現出来ないので、是非実物を見て頂きたい。またこのドローイングは、こともあろうにセロテープで無造作に壁に貼られていた。左上が欠けているのは、奈良自身が剥がす際に欠損したものである。同様に他の角も、セロテープの糊跡が残っている。色鉛筆でわら半紙に描いたドローイングであるが、それらを含めても、このドローイングの価値がいささかも下がることはない。むしろ、だからこそ奈良美智の原点を我々に生き生きと見せてくれる。左端には奈良自身の筆記で、I don't know why, now I'm so happy（私は今どうしてこんなに幸せかわからない）Where do you come from?（あなたは何処から来たのか？）Our house is very very very fine house!（わたしたちの家は、とっても、とっても、とってもすばらしい家です！）A Little Wonderful House（すばらしい小さな家）などと、これまたカラフルな色使いで描かれている。この文章は、短い東北の夏、弘前ねぷたで一気に爆発する津軽人奈良の DNA が感じられる。ゴーギャンの名作『我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか』に通ずる、奈良美智の出発点を探る上で重要なメッセージである。

周辺お食事マップ

日本橋劇場近隣の主な喫茶店やレストランをご紹介します。
休憩中ホール内でお待ち頂くことはできますが、飲食禁止となっております。
ロビーでの飲食は出来ます。３Ｆに自動販売機があります。

１～２回目の休憩に利用出来るお店

① ジョナサン ファミレス
② バーミヤン ファミレス（中華）
③ 三原堂本店　和菓子
④ 重盛の人形焼
⑤ つくし　和菓子、甘味処
⑥ オクシタニアル　カフェ
⑦ カフェマスターズ　喫茶
⑧ Ｔ＆Ｍカレーライス
⑨ ロイヤルパークホテル
　コーヒーショップ シンフォニー
　ロビーラウンジ　フォンテーヌ
⑩ 手打ちうどん（セルフ）
⑪ アウル　喫茶
⑫ マンチーズ・ダイナー　洋食
⑬ 水天宮前のやきとり屋さん
⑭ シディーク インドカレー
⑮ 初音 あんみつ
⑯ すし 江戸浜
⑰ そば 松竹庵
⑱ らーめん いなせ
⑲ 海鮮三崎港
⑳ マクドナルドハンバーガー
㉑ 牛丼吉野家
㉒ 柳屋（たい焼）創業大正５年
　天然物の東京三大鯛焼き

２回目の休憩に利用出来るお店

㉖ フルール　洋食
㉗ 来々軒　中華料理
㉘ コルレオーネ　イタリアン
㉙ 翠蓮（スイレン）中華料理
㉚ 其ノ田水産　魚介料理
㉛ 鉄板焼 二平 日本橋人形町
㉜ すし天ぷら あき

１回目の休憩に利用出来るお店

㉓ シェルブール　喫茶店
㉔ 稲にわうどん 割烹日本橋古都里
㉕ カフェ ミュゼアッシュ 美術館喫茶

日本橋オペラ 2015

リヒャルト・ワーグナー作曲 / 台本　Richard Wagner
楽劇「トリスタンとイゾルデ」　Tristan und Isolde

（全曲　原語上演　日本語字幕付）

室内オーケストラ版初演　編曲：佐々木 修

パート譜は IMSLP（Petrucci Music Library）で公開されます

2015 年 5 月 2 日（土曜日）　日本橋劇場（日本橋公会堂４F）

第１幕：13:00
第２幕：15:30
第３幕：18:00　　上演時間：各幕約８０分

公演監督　福田祥子
指揮　佐々木 修
演出/字幕　舘 亜里沙

キャスト：

トリスタン第１幕〜第２幕	片寄純也
トリスタン第３幕	升島唯博
イゾルデ	福田祥子
マルケ王	片山将司
クルヴェナル	勝村大城
ブランゲーネ	平舘直子
若い水夫 / メーロト / 船員	並木隆浩
牧人 / 船員	堀越尊雅
旗手 / 船員	望月一平
船員	奥村泰憲

スタッフ：

美術	岩谷 駿
照明	田村公宝
衣装	杉澤香織
ヘアメイク	エイミー前田
舞台監督	丸山直己
演出助手	森谷健太郎
稽古ピアノ	小滝翔平
	鈴木架哉子
ドイツ語指導	升島唯博
プログラム編集	佐々木 修

オーケストラ：

1stヴァイオリン	三ツ木摩理
	(コンサートマスター)
	上原千陽子
2ndヴァイオリン	佐藤 茜
	岡崎晶子
ヴィオラ	力久峰子
	中村紀代子
チェロ	野津真亮
	松谷明日香
コントラバス	鈴木 智
フルート	菊池洋子
オーボエ	鈴木深恵
イングリッシュホルン	上田 恵
クラリネット	倉内理恵
バスクラリネット	薗田加奈子
ファゴット	大内洋介
1st ホルン	中澤幸宏
2nd ホルン	山田 愛
ハープ	佐藤理絵子
ティンパニー	大里みどり

主催：日本橋オペラ
共催：ディーヴァ株式会社　株式会社マエストロ　日本橋オペラ研究会
協力：東京国際芸術協会　字幕 / 映像 まくうち

表紙絵画：ニノ・カルミゼ作「トリスタンとイゾルデ」2014
特別公開：奈良美智作「A Littele Wonderful House」1984